

知的障害特別支援学校におけるカリキュラム・マネジメント実践のための一試み

－ 生活単元学習の「単元系統表」の作成と授業改善の取組を通して －

宮城県立山元支援学校 長谷 葉子

概 要

本校では、教育課程の再編成や改善に係る諸課題を、総括的に解決するカリキュラム・マネジメント推進に向けた手立てを構築することが求められている。本研究の目的は、各教科等を合わせた指導である生活単元学習の学習内容に含まれる教科等との関連を「見える化」した「単元系統表」を作成し、それを踏まえた授業実践を行い、授業改善サイクルの構築に向けた取組を通して、本校のカリキュラム・マネジメント実践につなげる一試みとするものである。

1 主題設定の理由

本校は、隣接する国立療養所宮城病院（現「独立行政法人国立病院機構宮城病院」）に入院する義務教育の学齢期の児童生徒を対象とした病弱教育の養護学校として開校し、平成17年に知的障害教育部門が開設され、障害併置校となった。近隣地域の児童生徒数は減少傾向にあるが、都市部から通学する高等部生徒数の増加に伴い、知的障害のある児童生徒の受け入れを開始してから児童生徒数及び教職員数は最多となった（平成31年4月現在）。このことから、児童生徒の自立と社会参加を見据えた個別の教育的ニーズに応える指導の更なる工夫改善が求められている。

また、教員の世代間バランスが変化し、特別支援教育に関わる経験の差や知見の継承も課題となっている。そのような中において、本校の教員には、知的障害のある児童生徒を予測困難なこれからの社会に送り出すという職責を自覚し、自立と社会参加を見据えた「生きる力」を確実に身に付けさせるための授業改善の視点を持つこと、カリキュラム・マネジメントしていくという意識を持ち、学校組織の一員として取り組んでいくことが求められる。

本校では、学校運営方針のひとつに「一人一人が学ぶ楽しさを味わい生き生きと活動する学校」を掲げている。そのため児童生徒一人一人の障害の状態や特性、教育的ニーズを的確に把握し、個に応じた指導の創意工夫に努め、その可能性を最大限に引き出すための教育の充実を図っている。そして努力項目として、12年間を見据えた系統的な教育課程の編成を組織的計画的に行うことを示している。

この方針を受け、校内研究では本校の児童生徒の実態を適切に把握し、指導目標や内容を把握して授業づくりを行うことをねらいとして、平成28年度から29年度において自立活動と各教科（国語、算数・数学）を取り上げ、共同研究を行ってきた。研究の成果として「自立活動指導シート」と本校版国語、算数・数学の「指導内容表」を作成し、適切な実態把握の基で段階的な指導ができる基盤を整えることができた。しかし、他教科・領域との関連については課題が残されたため、平成30年度より卒業後の生活を見据え、生活を豊かに送る力を身に付けた児童生徒の育成を目指して、各教科等を合わせた指導である生活単元学習の校内研究を開始した。生活単元学習の指導内容を、育成を目指す資質・能力で再整理し、12年間の系統性のある内容に編成している段階であるが、学部の枠を越え12年間の系統的な内容として編成するためには、学校組織としての取組を構築することが課題である。

以上のことから、本研究では生活単元学習の「単元系統表」の作成と授業改善のサイクルを組織的に構築することで、本校のカリキュラム・マネジメント実践に向けた提案をすることができると考え、本主題を設定した。

2 主題・副題について

2. 1 「知的障害特別支援学校におけるカリキュラム・マネジメント実践」について

2. 1. 1 「知的障害特別支援学校のカリキュラム」について

知的障害特別支援学校の教育課程は、自立活動を基盤として、各教科、特別の教科 道徳、外国語

活動（外国語科），特別活動によって編成される¹。そして，学校教育法施行規則第130条第2項より，「特に必要があるときは，各教科，特別の教科である道徳，外国語活動（外国語科），特別活動及び自立活動の全部又は一部について，合わせて授業を行うことができる」（以下，各教科等を合わせた指導）と定められている。

各教科等を合わせた指導について，特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（以下，解説各教科等編）には「個々の児童の実態に即して，教科別の指導を行うほか，必要に応じて各教科，道徳科，外国語活動，特別活動及び自立活動を合わせて指導を行うなど，効果的な指導方法を工夫するものとする。その際，各教科等において育成を目指す資質・能力を明らかにし，各教科等の内容間の関連を十分に図るように配慮するものとする」と示されている。

知的障害のある児童生徒は，学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく，実際の生活で生かすことが難しいという学習上の特性がある。本校でも，知的障害のある児童生徒を対象とする教育課程を設置しており，各教科等を合わせた指導である生活単元学習の授業を行っている。そのため，知的障害のある児童生徒の状態や経験に応じて，実際の生活に即し具体的に指導内容や方法を工夫し，生活に必要な知識及び技能等を効果的に身に付けることができるように，全学部で授業を行っている。その内容は，生活に必要な知識及び技能，思考力・判断力・表現力等や学びに向かう力，人間性等を育む学習であり，そのために各教科等の見方・考え方を生かしたり，働かせたりすることのできる内容を含んでいる。このことは，教科等を学ぶ本質的な意義を成すものであり，教科等の学習を卒業後の生活へとつなぐ学び，すなわち生活で生きる力を身に付けさせる学びであるといえる。そのため生活単元学習は，知的障害特別支援学校のカリキュラム・マネジメントを実践するための切り口としてふさわしいと考えた。

そこで本研究では，各教科等を合わせた指導である生活単元学習を取り上げ，生活単元学習における各教科等の目標や内容との関連や，育成を目指す資質・能力，12年間の系統性を明らかにすることで，本校のカリキュラム・マネジメント実践につなげることができると捉え，研究を行う。

2. 1. 2 「カリキュラム・マネジメント」について

新学習指導要領において，カリキュラム・マネジメントは，「児童生徒や学校，地域の実態を適切に把握し，教育の目的や目標の実現に必要な内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと，教育課程の実施状況の評価してその改善を図っていくこと，教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことに努めるものとする。その際，児童又は生徒に何が身に付いたかという学習の成果を的確に捉え，個別の指導計画の実施状況の評価と改善を，教育課程につなげていくよう工夫すること」と定義されている。

また，独立行政法人国立特別支援教育総合研究所においては，「学習指導要領を中心としながら，各学校が設定する学校教育目標を実現するために，どのように教育課程を編成し，どのようなプロセスを経て，それを実施・評価し改善していくかということを中心とに据えた概念²」と定義している。

本校においては，児童生徒一人一人の障害の状態や特性，教育的ニーズを的確に把握し，個に応じた指導の創意工夫に努め，その可能性を最大限に引き出すための教育の充実を図ることを目指す学校像の柱の一つに掲げている。その実現のため，12年間を見据えた系統的な教育計画を組織的計画的に行うことと，地域と連携・協力した特色ある教育活動の推進を本年度の努力事項で示している。

本研究においては，これらのことから「教育内容の系統性と各教科等の関連の整理，授業改善の取組，人的又は物的な体制の確保と改善」を本校の「カリキュラム・マネジメント実践モデル」として捉え，その中の「教育内容の系統性と各教科等の関連の整理，授業改善の取組」を中心として取り組む。

¹ 中学部には総合的な学習の時間，高等部には総合的な探究の時間が加わる。

² 「知的障害教育における『育成を目指す資質・能力』を踏まえた教育課程の在り方—アクティブ・ラーニングを活用した各教科の目標・内容・方法・学習評価の一体化—（研究成果報告書）」（平成29年3月 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所）

2. 2 「生活単元学習の『単元系統表』の作成と授業改善の取組」について

2. 2. 1 「生活単元学習の『単元系統表』の作成」について

2. 1. 1より本研究では、生活単元学習の「単元系統表」を、学習内容に含まれる各教科等との関連を整理し「見える化」したものと作成した（補助資料YH補1～4参照）。その構造（図1）は、生活単元学習の単元を、遊び単元、季節単元、校外宿泊学習単元等に分類した上で、単元概要一覧、関連する教科一覧、学習内容表の項目で示した。

具体的には学部で行われている校外宿泊学習単元を取り上げ、本校の生活単元学習の「単元系統表」のモデルとして作成した。小・中・高の12年間の系統性、学習内容に関連する各教科等の目標・段階、育成を目指す資質・能力を一覧して把握できるようにすることで、学習指導と学習評価の一体化を図り、授業の質の向上、個に応じた指導の充実につなげていくものとする。

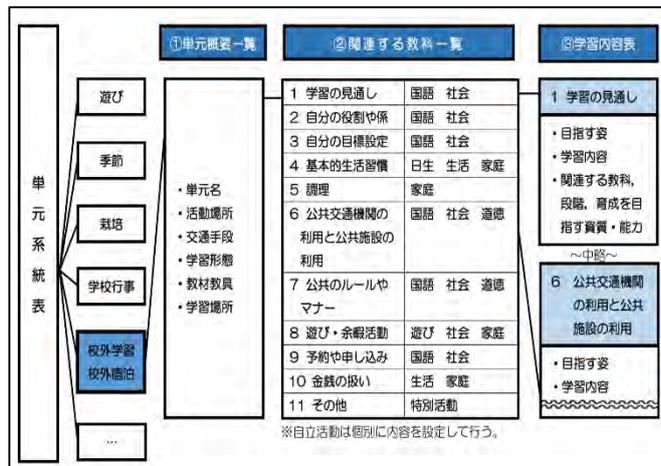


図1 「単元系統表」の構造

具体的には学部で行われている校外宿泊学習単元を取り上げ、本校の生活単元学習の「単元系統表」のモデルとして作成した。小・中・高の12年間の系統性、学習内容に関連する各教科等の目標・段階、育成を目指す資質・能力を一覧して把握できるようにすることで、学習指導と学習評価の一体化を図り、授業の質の向上、個に応じた指導の充実につなげていくものとする。

2. 2. 2 「『単元系統表』を踏まえた授業改善の取組」について

「単元系統表」によって「見える化」した生活単元学習の学習内容を踏まえ、単元構想・授業実践を行い、評価・改善のサイクルにつなげることが重要と考える。本研究における実践及び各学部の授業実践で得られた評価を、本校の教科・領域部会、教育課程委員会につなぎ、学校組織として生活単元学習の授業改善に向けたサイクルを機能させるための取組を行う。その手順を以下に示す。

(1) 「単元系統表」を踏まえた単元計画について

「単元系統表」を踏まえて単元計画を立て、児童生徒の目標設定に至る手順を示す（図2）。学習内容に含まれる各教科等の関連などが「単元系統表」で明らかになることで、育成を目指す資質・能力、各教科等の目標や内容・段階を根拠として単元構想を行うことができ、個に応じた指導の充実に資する単元計画ができると考える。

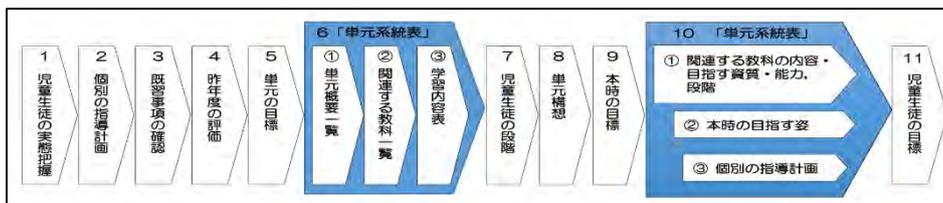


図2 単元計画の手順

(2) 授業改善サイクルについて

「単元系統表」を踏まえて単元計画を作成し、授業実践を行い、授業検討会を行う。そして、本実践の評価を教科・領域部会、教育課程委員会で検討することで、学校組織として授業改善に向けたサイクルを機能させるための取組を行う（図3）。

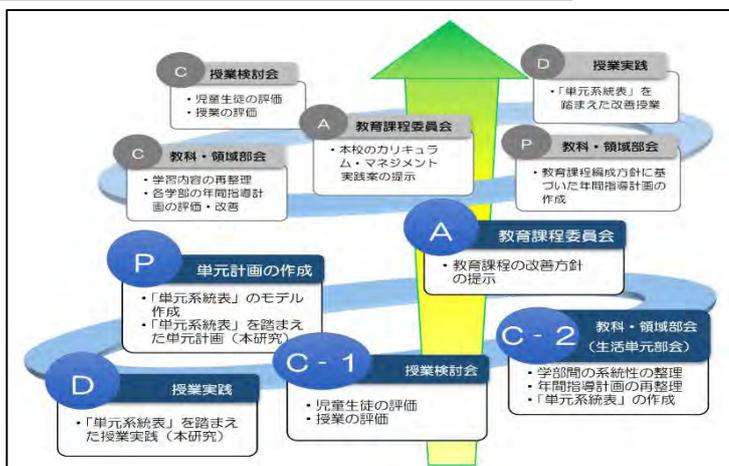


図3 授業改善サイクル

3 研究の目的と方法

本研究の目的は、生活単元学習の「単元系統表」を作成し、授業改善サイクルを組織的に構築することで、知的障害特別支援学校のカリキュラム・マネジメント実践のための一試みとして提案するも

のである。この目的のために、生活単元学習の「単元系統表」を作成し（4. 2）, 「単元系統表」を踏まえて単元計画を行うためのガイドを作成し、それに基づいて授業実践を行い（4. 3）, 授業検討会にて授業実践の評価を行う。授業実践・評価・改善の一連のサイクルを、校内の教科・領域部会、教育課程委員会につなぎ、このことを他教科・領域への実践に広げ、研究を通じた教師の意識の変化や児童生徒の変容、授業改善サイクルの取組を通じた生活単元学習のカリキュラムの変容により本研究の有効性を検証する（5）。

4 研究の実際

4. 1 意識調査と分析

4. 1. 1 調査のねらい

教職員に対し、生活単元学習の授業における各学部の実施状況や課題意識を把握し、カリキュラム改善のための課題を明らかにするとともに、生活単元学習の「単元系統表」及び「単元計画作成ガイド」の作成に生かす。

4. 1. 2 調査対象

宮城県立山元支援学校教職員（55名）

4. 1. 3 調査期日

令和元年7月下旬及び11月上旬

4. 1. 4 調査方法及び内容

質問紙法（選択肢式・記述式）

4. 1. 5 調査結果及び分析（1回目）

令和元年5月1日現在の本校の教員の教諭・講師の年齢構成（図4-1）、教職経験年数（図4-2）、特別支援教育経験年数（図4-3）からは、教師の世代間のバランスが二層化していることや、教職経験年数と特別支援教育経験年数は相関していないことが読み取れる。特別支援教育の知見の継承や専門性の維持・向上は、本校の課題であると考えられる。

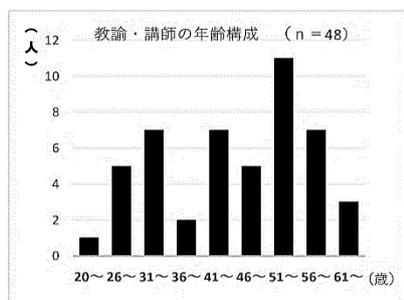


図4-1 教諭・講師の年齢構成

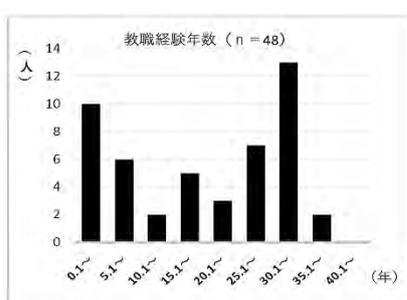


図4-2 教職経験年数

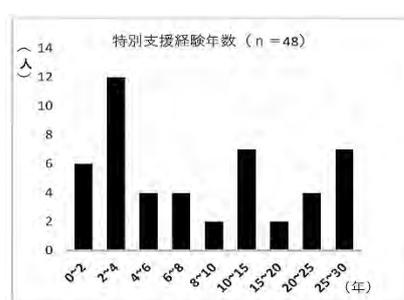


図4-3 特別支援教育経験年数

表2は、生活単元学習の授業づくりにおいて難しさや課題と感じていることについての調査である。記述内容からは、児童生徒の個人差に応じた目標設定、指導技術の向上等が課題であることや、本校の教育計画の内容や生活単元学習の単元計画を引き継ぐシステムの整備についての回答が多数挙げられた。

表2 生活単元学習の授業づくりにおいて、難しさや課題を感じている主な回答 n=49

生活単元学習の授業づくりにおいて、難しさや課題を感じていることについて	
・教育計画（年間指導計画，単元目標，単元計画）に関すること （20名）	（記述内容） ・年間指導計画と別冊（各学部の計画）の整合性がとれていない部分がある。 ・ねらいが高過ぎたり，多過ぎたりするので計画が難しい。 ・小学部・中学部・高等部の各学部で蓄積した単元計画や指導案は，教科との関連が十分でない。 ・計画で示されているが個々の児童生徒の実態が変化し異なっているため，個の実態に応じた指導が難しい。

<ul style="list-style-type: none"> 生活単元学習の理解に関すること (9名) 	<ul style="list-style-type: none"> どの教科を合わせているのか、学習内容が教科のどの部分に当てはまるかについて、理解して授業を行うことができていない。 各教科等を合わせた指導において、教科を押さえた指導ができていないか不明確である。
<ul style="list-style-type: none"> 評価・改善の仕組みに関すること (15名) 	<ul style="list-style-type: none"> 単元計画や指導案、反省や学習に関する評価を記録し、次年度等に引き継ぐ仕組みの整備が必要である。 児童生徒の実態が変わってきているのに、授業は前年度踏襲であることが多い。授業改善していく意識と実施できる体制を整えていくことが必要。
<ul style="list-style-type: none"> 授業づくりに関すること (12名) 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が学習した結果、何ができるようになったかが体感・実感できる学習場面の設定が必要である。 生徒の主体性、自主性を伸ばすための工夫をどのようにしていくか。 個人差が大きい中で、生徒全員の興味・関心を引き出すための授業構成が難しい。 実態の大きく異なる生徒達に対し、集団で授業をする際に、授業の組み立てや計画、実践が難しい。
<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の実態への対応に関すること (14名) 	<ul style="list-style-type: none"> 生単は本来なら個人差で分けた指導ではないとのことだが、実際はある程度実態別になるのではないか。 集団を構成する児童生徒一人一人の実態を把握した上で目標設定することが大切。初めに題材、単元ありきで単元に生徒を合わせるものではない。 個々の実態が違い、差が大きいので実施の際に各自に対しての配慮が行き届きにくい。
<ul style="list-style-type: none"> その他 (2名) 	<ul style="list-style-type: none"> 校外学習の行先や目標を、他の学部の教員は把握できていない。学部が異なっても行先が同じなら、ねらいがどう異なるのか、なぜ当該学部でこの行先を選ぶのか、他の学部の先生方が学部のねらいを把握できるようになると、系統性や連続性のある指導ができるようになると思う。 地域で生まれ育った児童生徒が地域で生活していくために、地域での学習を取り入れたほうが良いと思う。公共交通機関や施設も復興してきている。学部単位だけにとどまらず、学部の垣根を超えて検討していくとよいと思う。

これらのことから、学校全体として生活単元学習の理解を深めながら、生活単元学習の学習内容に含まれる教科等の関連を「単元系統表」を用いて明らし、「単元系統表」を踏まえて、単元計画を作成し、授業実践・評価・改善の取組を機能させていくことで、生活単元学習の授業の質を向上させていくことができると考える。

4. 2 生活単元学習の「単元系統表」の作成

解説各教科等編では、生活単元学習の単元について「実際の生活から発展し、児童生徒の知的障害の状態や生活年齢等及び興味や関心等を踏まえたものであり、個人差の大きい集団にも適合するものであること」と示されている。そのため、個別の指導計画や学習集団全体の実態を把握した上で、児童生徒の教育的ニーズに応じた目標を設定し内容を組み立てていくことになる。

しかし、本校の生活単元学習の授業では、児童生徒の障害の状態が多様で個人差も大きいため、授業を成り立たせること自体に重点が置かれてしまい、どの教科のどの目標や内容を合わせているのかを明確にしてこなかったという現状がある。そのため、単元の目標設定や単元計画、そして評価も曖昧になり、授業改善を図る視点が明確ではなかった。また、同単元でも他の学部がどのような目標でどのような学習内容を行っているか把握せずに当該学部の計画を学部内で計画、評価・反省を行ってきたため、学校として教育内容の系統性についても不明確な状態だった。

以上のことを解決するために、学校として生活単元学習の目標や内容を小・中・高の12年間を見通して、学習内容に何の教科が関連しているか、そしてどのような資質・能力を身に付けさせることができるかについて整理して「見える化」し、教師が指導と評価の根拠として用いることのできるものにする。

具体的には、本校の全学部で行われる校外宿泊学習単元を取り上げて「単元系統表」を作成し、単元概要一覧(表3)、関連する教科一覧(表4)、学習内容表(表5)の構造で示す。

(1) 単元概要一覧について

単元概要一覧(表3)は学部間における学習内容の系統性を把握するものである。

内容項目は学部の単元名、実施時期、宿泊数、学習場所や施設、公共交通機関の利用について

一覧で示した。下段は、学習形態、教材・教具、学習場所で示した。

使用方法については、授業者が単元計画の際に当該学部の学習内容がどのように行われてきてどうつながっていくのかを把握し、当該学部の学習内容の位置付けを確認することで、学部段階の指導の根拠として用いることができるようにした。

また、学校としては本校の校外宿泊単元に関する学習内容の系統性を「見える化」することで卒業後を見据えた系統的な学習内容としてふさわしい内容であるか、そして地域資源の活用や人的・物的資源の活用についても検討する材料にすることができると考える。

表3 単元概要一覧（校外宿泊学習単元）

	小学部		中学部		高等部	
単元名	七ツ森にとまろう	修学旅行 那須に行こう	仙台宿泊学習に 行こう	修学旅行に行こう	仙台宿泊学習に 行こう	修学旅行に行こう
学年	2～6年	6年	1～3年	3年	1年	2年
時期	6月	10月	6月	12月	12月	12月
宿泊数	1泊2日	1泊2日	1泊2日	2泊3日	2泊3日	2泊3日
活動場所	七ツ森 万葉クリエイト パーク	那須 りんどう湖 レイクビュー	仙台 全体 楽天球場、NHK 学年別 1年：市内余暇施設 2年：ペニーランド 3年：うみの杜水族館	東京 東京スカイツリー 上野動物園 東京ディズニーランド 葛西臨海水族園	仙台 就労関係施設 市内歴史・文化施設 ・仙台城址 ・大崎八幡宮 ・メディアテーク等 余暇施設	京都、大阪 京都タワー 伏見稲荷大社 ユニバーサルスタジ オジャパン 大阪城 道頓堀
宿泊場所	七ツ森希望の家	ロイヤルホテル 那須	ホテル白萩	シーサイド江戸川	障害者福祉センター	ホテル京阪 京橋グランデ
交通手段	かりん号	かりん号 新幹線	かりん号 JR バス 地下鉄	かりん号 JR バス 地下鉄 新幹線	JR バス 地下鉄	JR バス 地下鉄 飛行機
学習形態	・全体～個別 ・教師や友達と一緒に		・全体～個別 ・友達と分担して ・友達と状況づくりの上で、 自分で取り組んでみる。		・全体～個別 ・グループ内で分担して ・できる状況づくりの上で、 自分で最後まで取り組むことができる。	

(2) 関連する教科一覧について

関連する教科一覧（表4）は、各学部で共通して行われる学習内容を1から11の項目に分け、それぞれに関連する教科等を示したものである。小・中・高と学部段階が上がるにつれて、関連する教科の内容が生活科から社会科へつながっていくことや、公共のルールやマナーの項目では道徳科との関連を示した。このように、学習内容に関連する教科等の内容を「見える化」したことで、教科等を意識した単元構成が可能になると考える。

表4 関連する教科一覧

	小学部		中学部		高等部	
	学習内容	関連する教科等	学習内容	関連する教科等	学習内容	関連する教科等
1	学習の見通し	生活、国語、算数	1 学習の見通しと計画	国語 数学 社会	1 学習の見通しと計画の立案	国語 数学 社会
2	自分の役割や係	生活 国語	2 自分の役割や係	国語 社会	2 自分の役割や係	国語 社会
3	自分の目標	生活 国語	3 自分の目標設定	国語 社会	3 自分の目標設定	国語 社会
4	基本的生活習慣	日生 生活	4 基本的生活習慣	日生 職業・家庭	4 基本的生活習慣	日生 家庭
5	-	-	5 -	-	5 調理	日生 家庭
6	公共交通機関や公共施設の利用	国語 生活	6 公共交通機関や公共施設の利用	国語 数学 社会	6 公共交通機関や公共施設の利用	国語 社会
7	公共のルールやマナー	国語 生活 道徳	7 公共のルールやマナー	国語 社会 道徳	7 公共でのルールやマナー	国語 社会 道徳
8	遊び	遊び	8 余暇活動	国語 社会	8 余暇活動	国語 社会 家庭
9	-	-	9 -	-	9 予約や申し込み	国語 社会
10	金銭の扱い	国語 生活	10 買い物、金銭管理	国語 数学 社会	10 買い物、金銭の扱い	国語 数学 家庭
11	振り返り	国語 生活 図工	11 振り返り	国語 美術	11 振り返り	国語 美術
	人との関わり	特別活動	集団行動、協力	特別活動	集団行動、協力	特別活動

(3) 学習内容表について

学習内容表は、学習内容に関連するいくつかの教科の内容を、教科の段階の考え方をを用いて一覧表としてまとめたものである。小・中・高の教科の段階を一覧表として「見える化」し、教科の

内容を段階的・発展的に見ていくことができるようにした。内容項目は、学習内容、目指す姿、関連する教科及び段階、育成を目指す資質・能力で示した（表5-1, 2）。

生活単元学習の授業では、学習内容は同じでも児童生徒一人一人の目標は異なる。同一学年であっても知的障害の程度や発達段階、生活経験等はそれぞれ異なるため、個に応じた目標を設定することになる。例えば、生徒の生活年齢が高等部段階でも生徒の知的障害の状態等から高等部段階の目標を達成することが難しい場合がある。その際は、この表の教科の段階を中学部や小学部の内容を見ていくことで、生徒の段階に即した教科の内容を把握することができる。また、当該学部の目標を達成している場合は、発展的な内容を扱うこともできる。

このように、この表を用いることで、本時の学習内容にどの教科が関連しているか、そしてその教科の内容と段階、育成を目指す資質・能力を把握することができ、本時の目標設定の根拠にすることができる。と考える。

目指す姿は、本時の学習内容と各教科の内容・段階との関連を、教員間で共有しやすくするために、具体的な児童生徒の姿として示した（表5-2）。

表5-1 学習内容表（内容項目）

学部	小学部	中学部	高等部
学習内容	学習の見通し	学習の見通しと計画	学習の見通しと計画立案
段階	1段階		
目指す姿	<ul style="list-style-type: none"> 教師や友達への働き掛けを感じとり、注目したり反応を返す。(国：A聞くこと・話すこと・イ) 日にちに興味を持つ。(生活：ウ・日課・予定) 訪問先に関心を持つ。(生活：コ) 		
主な学習内容	<ul style="list-style-type: none"> 学習の目標を知る。 本日の日付、曜日、当日までの日数を知る。 訪問先の施設や公共交通機関等を知る。 計画表を作成する。(日付、訪問先、※児童の実態に応じて、上記の段階から) 		

表5-2 学習内容表（目指す姿）

段階	小学部	中学部	高等部
国語 [知識・技能]			
国語 [思考力・判断力・表現力等] A 聞くこと・話すこと			
生活 ウ 日課・予定			
算数・数学 C 測定			
算数・数学 D データの活用			
生活 (小) コ 社会の仕組みと公共施設			
社会 (中) イ 公共施設と制度			
社会 (高) イ 公共施設の役割と制度			
社会 (中) オ 我が国の地理や歴史			
社会 (高) オ 我が国の国土の様子と国民生活、歴史			
学びに向かう力・人間性			

4. 3 「単元系統表」を踏まえた単元計画の作成・授業実践

4. 3. 1 生活単元学習の「単元計画作成ガイド」について

「単元計画作成ガイド」（補助資料YH補5～11参照）は、「単元系統表」を基に単元計画を立てる際に、授業者が把握しておくことや単元計画の手順例をまとめたものである（図5-1, 5-2）。

生活単元学習の「単元計画作成ガイド」の内容項目	
P1～	生活単元学習の「単元系統表」 生活単元学習の「単元系統表」とは生活単元学習の「単元系統表」の構造
P2～	①単元概要一覧, ②関連する教科一覧
P3～	③学習内容表
P5～	生活単元学習の「単元計画作成ガイド」 1 知的障害のある児童生徒の特性と生活単元学習 2 生活単元学習とは 3 単元計画で考慮すること
P6～	4 学習内容に含まれる教科の段階
P7～	5 単元計画を立てよう
P8～11	6 単元計画の実際 校外宿泊学習単元「修学旅行に行こう」

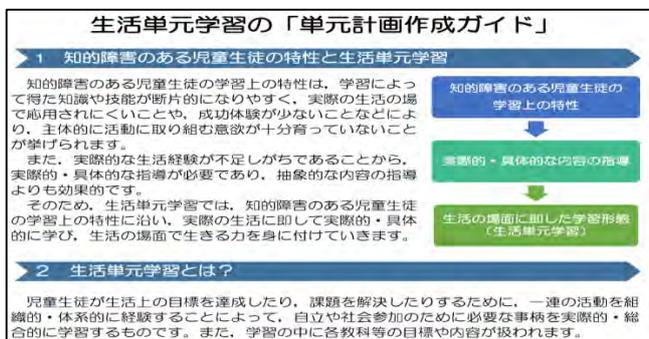


図5-1 単元計画作成ガイド（一部抜粋）

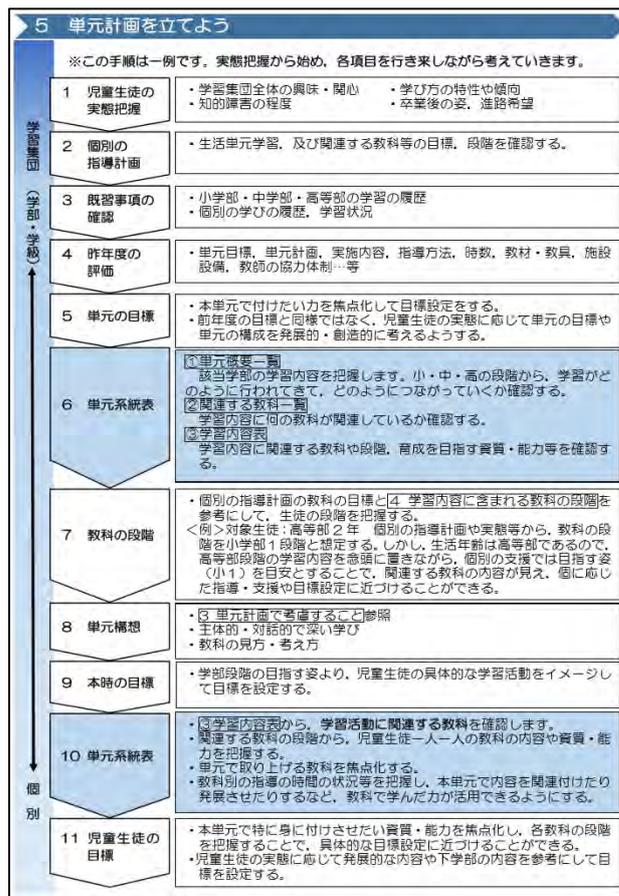


図5-2 単元計画作成ガイド（単元計画を立てよう）

4. 3. 2 単元計画の作成

「単元系統表」を踏まえて生活単元学習の単元を構想し授業につなげるためには、いくつかの手順が必要になる。本研究の授業実践として高等部2年で行われる校外宿泊学習単元「修学旅行に行こう」の事前学習を行う。以下に「単元系統表」を踏まえた単元計画の手順の一部と授業実践の構想例を示す。

- (1) 児童生徒の実態把握～単元目標の確認
- (2) 「単元系統表」の確認（図5-3）
 - ① 単元概要一覧
学部間の学習の系統性を確認する。
 - ② 関連する教科一覧
学習内容に関連する各教科及び内容を確認する。
 - ③ 学習内容表
関連する教科の段階と児童生徒の段階を確認する。

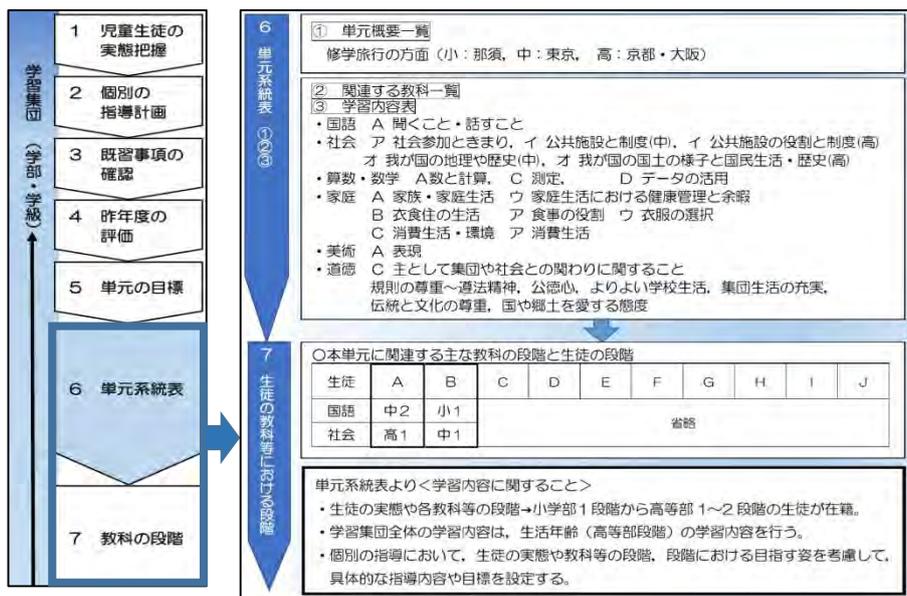


図5-3 単元計画作成ガイド（一部抜粋）

- (3) 単元構想～本時の目標
 (4) 「単元系統表」の確認
 (図5-4)

③ 学習内容表

生徒個々の学習内容に関連する教科、内容、段階、目指す資質・能力を確認する。

(5) 生徒の目標

高等部段階の目指す姿、生徒の段階、個別の指導計画をすり合わせ本時の生徒の目標を設定する。

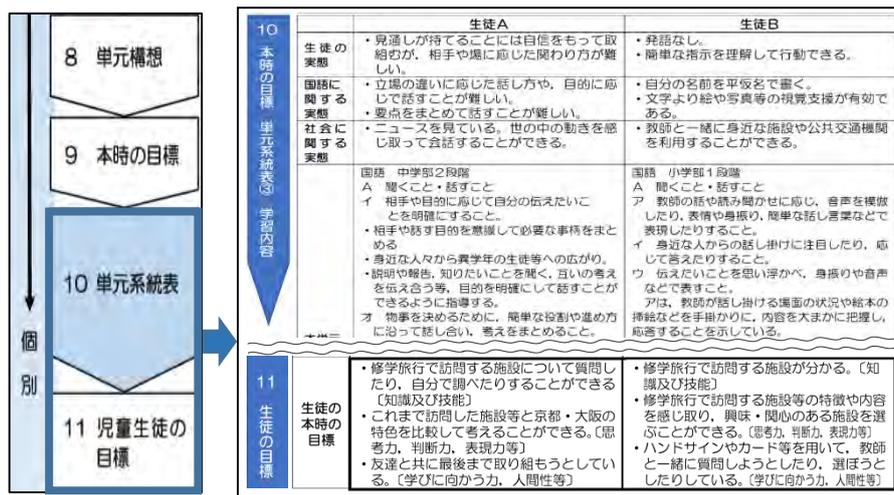


図5-4 単元計画作成ガイド（一部抜粋）

この作成計画の手順は一例であり実際は項目を行き来しながら作成していくものと考えられる。

5 実践検証

5.1 所属校での実践検証

本研究で作成した生活単元学習の「単元系統表」及び「単元計画作成ガイド」の有効性の検証と、これらを踏まえた授業実践が本校の生活単元学習の授業改善へ向けた取組として有効であったかについての検証を行った。

5.1.1 授業実践と考察

- (1) 実施期日 令和元年10月23日(水)
 (2) 単元名 「修学旅行に行こう」(20時間扱い)
 (3) 小単元名 「京都・大阪の訪問先を調べよう」(本時1～2/20)
 (4) 対象生徒 高等部2学年2学級10名(男子8名、女子2名)
 (5) 生徒の実態

本校中学部から高等部へ入学した生徒が6名、地域の特別支援学級または通常学級から入学した生徒が4名、うち自閉症の診断を受けた生徒が5名、ADHDの診断や傾向のある生徒が2名、聴覚障害を併せ有する生徒が1名在籍している。7名は言葉による意思疎通が可能であり、3名は日常生活や意思疎通等、頻繁に教師の支援が必要とする生徒である。S-M社会生活能力検査第3版によると生活年齢が3歳台から12歳台の値であり、個人差が大きい学年である。

(6) 「単元系統表」との関連

本時は事前学習の第1次「活動内容の見通しと計画立案」に関する内容を実施した。本時の学習内容に含まれる主な教科を「単元系統表」より、国語科「A聞くこと・話すこと」、社会科「わが国の国土の様子と国民生活、歴史」「イ 公共施設と制度」とし、教科の段階を生徒一人一人の目標設定や指導の手立てとして授業を構成した。

(7) 既習事項及び本時のねらいについて

修学旅行に対する高等部2学年の生徒の全体的な興味・関心は、修学旅行自体に期待感はあるものの、生活圏から遠く離れた地である京都・大阪の寺社や史跡等に対する興味・関心は薄いと想定した。そのため、京都・大阪で訪問する寺社や史跡等(大阪城、伏見稲荷大社等)に興味・関心を持ち、主体的に学習に取り組むための手立てとして、昨年度実施した仙台宿泊学習の訪問先(仙台城址、瑞宝殿等)と比較することで違いや特徴に気づき、知りたい、行ってみたいという意欲を喚起させ、生徒達が調べたことを修学旅行の計画に反映することで達成感を感じさせたいと考えた。そして生徒達が調べたことを、日本を代表する歴史や文化として収束することで、社会科への関連を感じさせることをねらいとして単元を構成し、授業を実践した。

(8) 本時の生徒の取組の様子及び考察

事前の想定に反し、大阪城について調べようとした生徒が10名中5名と多くなった。書籍から大阪城の年表を熱心に書き写す生徒や、豊臣秀吉や他の戦国時代の武将に関するエピソードを得意気に話す生徒、大阪城の石垣や天守閣の画像に見入る生徒等、それぞれの興味・関心に沿って意欲的に調べる様子が見られた。この5名の生徒は、社会科の段階を高等部1段階程度と想定した生徒が多く、中学校社会科の授業を受けてきた生徒も含まれる。修学旅行の訪問先に関する学習の形態を教師主導ではなく、生徒の興味・関心に基づいて調べる機会や場面を設けたこと、そして社会科との関連を明らかにして単元構成を行ったことで、主体的に学習に取り組み、修学旅行に向けた意欲につながることができたと考ええる。

また、授業実践を行った2学年は生徒の個人差の大きな学年である。その中から生徒A、Bを抽出し、本実践のねらいや手立て、取組の具体的な様子について述べる。

① 生徒A

生徒Aは、見通しが持てることには自信を持って取り組むが、相手や場に応じた関わりに困難が見られる生徒である。生徒の実態や個別の指導計画から国語科の段階を中学部2段階、社会科の段階を高等部1段階と想定して個の目標設定や手立てを考えた。本時は、京都・大阪で訪問する施設について調べる学習を行ったが、同じ訪問先を複数の生徒や教師と共に調べたり、昨年度修学旅行の引率をした教師に質問する機会を設けたりする場面を設定することで、人と関わりながら学ぶ楽しさやよさが感じられるようにした。当日生徒Aは大阪城を選択し、グループの生徒と席を隣合わせて調べていたが、一人で調べたことをメモすることに集中していた。そのため教師が間に入り、他の生徒が調べたことに関心を持てるよう友達が調べたことを伝えたり、生徒Aが調べたことを他の生徒に伝えたりして働き掛けた。授業後の感想では、「〇〇君は『豊臣秀吉の鳴かぬなら鳴かしてみようホトトギス』について知っていました。驚きました。」と記入していた。また後日行った学習では、昨年度引率した教師に大阪城について質問する機会を設けたが、実際に自分が調べたことで興味が広がり、進んで質問する様子が見られた。修学旅行の訪問先を調べる学習をきっかけとして、大阪城に対する興味・関心が広がり、京都・大阪そして日本の歴史や文化に関する事柄について学ぶ機会とすることができたと考ええる。

② 生徒B

生徒Bは、教師の簡単な指示を理解し、ハンドサイン等で自分の思いを表出することができる生徒である。本時の単元目標は、本校の高等部段階の目指す姿を想定した目標であるので、生徒の実態や個別の指導計画から個の教育的ニーズに応じた目標を設定していくことになる。個に応じた目標設定を行うための根拠として、本単元の学習内容に含まれる国語科の段階を小学部1段階、社会科の段階を中学部1段階と想定した。このことを踏まえて生徒Bの目標は、修学旅行で訪問する施設が分かり、興味のある施設やその内容等を選び伝えることにした。

具体的な手立てとしては、個別のスケジュールや視覚支援を用いて本時の学習活動や修学旅行の活動内容に見通しを持たせた上で、教師と一緒に画像を見ながら「大きいね」「おいしそうだね」「鳥居がいっぱいあるね」等、話し掛けをしながら生徒の反応を見取り、訪問する施設の内容や特徴を感じ取らせ、興味のある施設やその内容を指差して選んだり、声に出して表出できるようにしたりすることである。生徒Bは、見通しが持てない状況や集中が途切れてしまうと教室から出て行ってしまうこともある生徒だが、本時は担当教師が生徒の隣で丁寧に反応を見取り、生徒の興味・関心や表出を引き出すことができたので、情報誌のページを自分でめくって指差したり、「オー」と声を出したりして思いを表出する姿が見られ、授業時間の最後まで取り組むことができていた。本生徒の実態や教科における段階を考慮したことで、生徒Bの目標に迫ることができたものと考ええる。

このように、個人差の大きな学習集団であっても、学習内容に関連する教科の段階を根拠とする

ことで、個に応じた目標設定や指導・支援、そして指導の充実につなげることができたと考える。

しかし、本時の学習内容に関する生徒の実態把握や既習事項の確認等についてTT間で十分行うことができなかったため、生徒の思考・判断にアプローチするまでには至らなかった。このことは各教科等を合わせた指導において各教科を明らかにしたからこそ見えてきた課題であると考え。教科の目標や内容を達成させるための指導技術や方法について工夫・改善を重ね、授業の質の向上を図っていきたい。

(9) 授業実践後の取組について

授業実践後、職場実習期間のため1か月程度時間が空いたが、12月に入り事前学習が始まると修学旅行の訪問先を自分で調べ、それをメモしたノートを持参して担任に見せる生徒や、生徒同士や担任と興味のある訪問先について会話する様子が見られた。修学旅行への意欲を喚起し、12月の事前学習につなぐ授業にすることができたと考えられる。

12月の授業実践は、高等部2学年担任がT1を引き継いで事前学習を行った。生徒達が修学旅行の訪問先に興味を持ち意欲的に取り組んでいた様子が担任間で話題になり、生徒達が特に興味を持って調べた大阪城や伏見稲荷大社を訪れる日の活動計画に関する単元では、生徒が調べたことを反映して授業が構成されていた。

伏見稲荷大社の活動計画を立てる単元では、生徒が興味を持った狐の像（お稲荷さん）を取り上げ修学旅行当日につなぐ展開がなされていた。なぜ伏見稲荷大社は狛犬ではなくて狐なのか、そしてなぜ狐は稲穂や鍵をくわえているのかについて問いを立て、どんな狐の像があるか探してやることをテーマとした。当日は、観光客の多さや千本鳥居の数の多さに圧倒されながらも、至る所に設置されている狐の像を我先に見つけようとしたり、狐の豊かな造形表現を写真に撮ったりする姿が見られた。事後学習では、狐がくわえている稲穂等の意味を調べまとめることができ、社会科に関わる目標を達成することができたと考える。

大阪城の活動計画を立てる単元では、生徒達が興味を持ったことがいくつもあったため、歴史に関すること、石垣に関すること、兜や鎧に関すること等、生徒の興味を分類した上で、分担して調べることにした。修学旅行当日は徒歩で大阪城に向かったが、高層ビルの間から見えてくる大阪城に驚いていた様子であった。現地に到着すると、石垣と自分の大きさを比べてその大きさを確かめたり、天守閣の迫力に「お城がある」「大きい」「立派」等と興奮気味に話したり、じっと見入ったりする様子が見られた。また、観光客で混雑する中ではあったが、好みの武将の兜や刀を身に付けて写真撮影をすることができ、満足気な様子であった。事前学習で仙台城址と比較する見方を用いて学習を行ったことで、日本を代表する歴史的建造物である大阪城の特徴について、より一層実感を持って理解することができたと考える。

一方、上記以外の学習場面では、教科が意識されることが少なく、活動ありきになってしまうことが多かった。また、生徒同士でグループを作り活動計画を立てる単元では、話し合い活動を行わせるための指導技術や一人一人の教科の段階に関わる実態把握の不足が課題として見えてきた。これらの学習に関する単元は、TT間で目標や授業展開の共通理解等を十分行うことができなかったことが主な理由と考えられるが、「単元系統表」を作成していない学習内容でもあった。

本学年は個人差の大きな学年だが、生活単元学習の単元計画の考慮点には、個人差の大きい集団にも適合するものであることと示されている。単元における学習内容を的確に設定するため、全体や個において何を学びとするか、本時に関する学習内容の「単元系統表」を作成しながら再考していきたい。

5. 1. 2 授業改善の取組について

(1) 授業検討会

授業実践の評価と課題を共有するため、全校で授業検討会を実施した。本研究の概要と授業実践のねらいを説明した後、質疑応答や意見交換を行い、校長、教頭より指導・助言をいただいた。授業実践の評価と課題について確認し、共有できたことは以下の2点である。

1点目は、生活単元学習の授業において、教科や段階を意識して授業づくりを行っていくことである。生活単元学習の「単元系統表」及び「単元計画作成ガイド」により、学習内容に含まれる教科の目標や内容、段階が見えるようになり、教科を根拠とした学習内容の選定や目標設定について理解を進めることができたと考える。2点目は、単元計画の手順についてである。「単元計画作成ガイド」を基に単元計画の手順例を示したことで、生徒の実態把握や既習事項の確認等の重要性を再確認する機会にすることができたと考える。

また、今回実施した授業検討会は本研究の概要等の説明に時間を要するため、これまで本校で実施してきたカード整理法を用いなかった。その結果、特別支援教育経験年数の豊富な教員から意見はいただいたものの、活発な意見交換の場にならず、本研究の説明と理解の場になってしまった。このことから、授業検討会については、検討会の在り方や検討内容の吟味を含めて在り方を検討するとともに、学校組織としての位置付けについて、教科・領域部会、教育課程委員会との関連を含めて再構築する必要があることが見えてきた。

(2) 教科・領域部会（生活単元部会）

授業実践の後、生活単元部会を10月末と11月末に2回実施した。生活単元部会に所属する教員の内訳は、知的障害教育部門は小学部1名、中学部2名、高等部4名、病弱・重度重複教育部門は4名である。

10月末の生活単元部会では、授業実践及び授業検討会後に行ったアンケートを基に話し合った。その中で特に話題になったことは、授業改善についてである。学習内容に含まれる教科や段階、そして単元計画の手順等を生活単元学習の「単元系統表」や「単元計画作成ガイド」で明らかにしても、それらを根拠にした授業であることが学習指導案に反映されたことが見えなければ、授業改善に向けた検討が難しいのではないかという意見が出された。そのために、単元観や個の目標等に教科との関連を記入することで、誰もが作成でき、そして理解できるような学習指導案の様式を工夫していく方向で進めていくことになった。

11月末の生活単元部会では、授業検討会の視点について話し合った。これまで本校では特別支援教育経験年数の差に左右されず意見を出し合えることをねらいとしてカード整理法を用いてきたが、その反面授業のねらいに沿った検討や授業の評価が曖昧になってしまうことが課題であった。前回の生活単元部会での検討した学習指導案の様式の変更と合わせて授業改善を図っていくためには、授業検討会の視点も教科との関連、育成を目指す資質・能力、そして主体的・対話的で深い学びの3つの視点が重要であることが確認された。これらの検討した内容を研究部や教育課程委員会につないでいく方向で話し合うことができた。

(3) 校内研究授業での取組について

授業実践後の11月中旬から12月上旬に、知的障害教育部門の小・中学部と病弱・重度重複教育部門で校内研究授業が行われた。授業で行われた単元は、季節単元「クリスマス会をしよう（小）」、「秋を感じよう（病・重）」、校外学習単元「秋の校外学習（中）」である。その際に作成された学習指導案には、生活単元学習の学習内容に含まれる各教科や内容、そして児童生徒一人一人の段階が児童生徒の実態と共に記されるようになった。

このことは、授業提供者及び指導案作成者が研究部員であったため、「単元系統表」及び「単元計画作成ガイド」の趣旨が周知され、実践できたことである。特に季節単元は、本研究で作成していない内容だが、単元の学習内容から教科の内容や段階を取り上げ、それを踏まえて個に応じた指導・支援が組み立てられていた。「単元系統表」及び「単元計画作成ガイド」は、特別支援教育経験年数等による指導・支援の差をできる限り少なくするために用いるものでもあるので、次年度は使い勝手も踏まえて実践を行い、検証を重ねていきたい。

5. 1. 3 調査結果・分析

本研究及び授業実践を通じた教員の意識の変容について、調査を行った。

表2 授業実践・事後検討会後の教員アンケートの回答について（n=24）

授業実践・事後検討会後の教員アンケートの回答	
<ul style="list-style-type: none"> ・単元計画に関すること (6名) 	<p>(主な記述内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元計画を立てるに当たり、「単元系統表」を基に各教科等との関連を含め、生徒がどの段階にいて、どのような力を身に付けることが必要なかを計画的に考えていかなければならないと思った。 ・「単元系統表」でチェックし、目標を見定めて「単元計画作成ガイド」に沿って授業を行ってみようと思った。 ・単元構成する際に参考にするのは、これまで自分が実践したことが基になってしまう。しかし「単元計画作成ガイド」や「単元系統表」を見ることで、授業のポイントが見付けやすくなり、それに沿った学習内容を構成することができると思った。 ・単元のつながりだけでなく学部間のつながりを意識しなければならないと感じた。単元の計画ありきではなくて、個に応じた指導・支援を考えていきたい。 ・授業を参観して、中学部段階から身に付けさせておく力について考えることができた。単元計画の立て方が参考になった。
<ul style="list-style-type: none"> ・生活単元学習の理解に関すること (5名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の所属する学部の生活単元学習のねらい、手立てを考え直す機会になった。単元の系統性を意識したい。 ・各教科等を合わせた指導に含まれる教科、段階を意識するきっかけになった。 ・教科(社会科)との関連を明確にして生活単元の授業を行うことの実際を見ることができた。 ・「単元系統表」で見える化したことで、教科との関連等が把握しやすくなった。今後は教科の目標を意識して授業を行っていかなければいけないと感じた。
<ul style="list-style-type: none"> ・授業改善に関すること (7名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業改善となると生徒の思考にどう働きかけるのかについての指導技術も必要になると思った。そのための教師側の抑えと、TT間の話し合い、事前準備が必要。 ・授業改善は一人一人の評価規準をしっかりしないとサイクル構築が難しいと思う。 ・T1以外の教師が、主として担当する生徒の実態や目標をしっかり捉えることが大切だと思う。
<ul style="list-style-type: none"> ・実態把握、既習事項の確認に関すること (2名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・実態把握、それに基づいた目標設定が重要であることを改めて実感した。何の力を身に付けさせていくかを整理し、そのためには授業でどんな手立てで学ぶかしっかり押さえた授業を行ってきたい。 ・学部内の単元のつながりについて把握する必要があることが分かった。しかし、昨年度実施した記録や実施計画が引き継がれていない。担任も変わり、どのように生徒の学びをつなげていけばよいか。
<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム・マネジメントに関すること (2名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム・マネジメントに向けて系統性を意識して学習展開することについて意識するきっかけになった。
<ul style="list-style-type: none"> ・その他 (2名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「単元系統表」は単元と学習指導要領の内容が分かりやすくまとめられていた。今回の単元だけでなく全ての単元でこのような資料があれば、確認しながら授業ができると感じた。しかし全学部の内容をカリキュラムが変わるごとに作成するのは大変だと思った。 ・「単元系統表」から個に対応した授業であったかが分からなかった。単元系統表がどのように生かされて授業につながるのかを知りたい。

「単元系統表」及び「単元計画作成ガイド」を基に、生活単元学習の学習内容に含まれる教科等との関連を「見える化」して授業実践を行ったことにより、教科の内容や学部間の段階(系統性)等を意識した授業づくりが必要であるという意識の高まりが調査結果から読み取ることができた。一方、授業改善に向けた取組については、指導技術や評価規準等の課題が残された。

6 研究の成果と課題

6.1 研究の成果

(1) 生活単元学習の「単元系統表」及び「単元計画作成ガイド」の有効性

授業検討会及び意識調査の結果より、本研究で作成した生活単元学習の「単元系統表」及び「単元計画作成ガイド」は、生活単元学習における教科等との関連を「見える化」したことで、教科等の目標や内容、段階を意識した授業づくりのきっかけとなり、生活単元学習の指導の充実につなげることができたと考える。また「単元計画作成ガイド」は、単元計画を立てる上で押さえておく必要な事柄を単元計画の手順例として示したことで、単元計画の立て方や教科の段階から個に落とし込んだ目標設定の手順について理解を得ることができた。

(2) 授業改善の取組について

本研究で作成した生活単元学習の「単元系統表」を踏まえて単元計画を作成し、授業実践を行い、授業検討会を行った。そして、本実践の評価を教科・領域部会の生活単元部会にて検討することができ、学校組織として授業改善に向けた取組につながり一歩とすることができた。

また、生活単元部会で検討した結果、授業検討会の視点を学部間の系統性、各教科等との関連、育成を目指す資質・能力、そして主体的・対話的で深い学びの視点で行うことや、これらの内容が学習指導案に反映できるように学習指導案の様式や考慮点を再整理していくことになった。今後は、検討した内容を教育課程委員会につなぎ、一連の授業サイクルが学校組織として継続した取組となるよう、次年度に向けて取り組んでいきたい。

6. 2 今後の課題

(1) 生活単元学習の「単元系統表」の活用に向けて

本研究で作成した生活単元学習の「単元系統表」は、生活単元学習の授業づくりの際に把握しておく内容を、学部間の系統性や各教科等との関連等を、単元概要一覧、関連する教科一覧、学習内容表のように構造化して示した。その結果、情報量が多くなり、汎用性という面で課題が残った。しかし、この「単元系統表」で示した内容は、生活単元学習の指導の根拠となるものである。また、「単元系統表」で示した内容を全て把握することが目的ではなく、指導に必要な情報を探し出せるように学習指導要領を根拠として取り上げてまとめたものである。次年度に向けて「単元計画作成ガイド」に「単元系統表」の見方や解説等を加えていくことや、あるいは手順や手法を精選していくことを含めて再考し、学校で実践を重ねながら活用しやすい形へ改善していきたい。

また、「単元系統表」を基に、生活単元学習の学習内容に含まれる教科等との関連を明らかにして授業実践を行ったことで、学習内容については概ね根拠を示すことができたが、教科の目標や内容を達成させるための指導方法や指導技術は、今後更なる工夫・改善を図っていく必要がある。

(2) 授業改善サイクルの構築へ向けて

今年度は「単元系統表」及び「単元計画作成ガイド」を作成し、授業実践、授業検討会、生活単元部会へつなぐことができたが、学校組織としての取組として構築するためには継続して授業改善サイクルを回し、機能させていくことが不可欠である。今年度の取組により、各教科等を合わせた指導において教科や育成を目指す資質・能力を明らかにしていくこと等について教員の意識の高まりは感じられるものの、学部間の学習内容の系統性を再整理していく必然性や課題意識を共有できるまでには至っていない。生活単元部会では組織として本校の教育内容の系統性を再整理する取組を行っているが、一人一人の教員が本校の各学部の教員が目線を合わせて共に検討することのできる単位は授業であり、授業検討会である。各教科等を合わせた指導である生活単元学習の各教科等の目標や内容との関連や、育成を目指す資質・能力、12年間の系統性を「見える化」し、それに基づいた単元計画、学習指導案、そして授業改善の視点で授業検討会を行う一連の取組を一歩一歩継続していくことで、授業改善サイクルを機能させていきたい。

引用・参考文献

- 文部科学省 (2018) 「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編 (幼稚園・小学部・中学部)」
 文部科学省 (2018) 「特別支援学校学習指導要領解説 各教科編 (小学部・中学部)」
 文部科学省 (2019) 「特別支援教育高等部学習指導要領」
 ジアース教育新社 (2018) 「育成を目指す資質・能力を踏まえた教育課程の編成
 ～知的障害特別支援学校におけるアクティブ・ラーニングの活用～」
 東洋館出版社 (2018) 「知的障害教育におけるカリキュラム・マネジメント」
 ジアース教育新社 (2017) 「特別支援教育のアクティブ・ラーニング～『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善～」

図表等の許諾について

図5-3, 5-4は、生徒の実態の一部である。生徒の氏名を伏せて資料を活用することとし、生徒の保護者及び所属校校長から許諾を得た。